

様式の異なる2つの遊び歌からの学び

～「初等音楽3・4」の演習で用いた歌唱教材の比較を中心に～

南 夏世

岡林 典子（京都女子大学）

1 はじめに

筆者らは、平成25年度より幼小の連携をふまえた音楽教育プログラムの開発研究に取り組んできた¹。K大学附属の幼稚園と小学校の協力を得て、これまでに幼小をつなぐ表現活動の教材開発を目指して継続的に実践を試みている。近年は幼小をつなぐ取組みが様々になされてきているが²、大切なことは、幼稚園の「遊び」中心の活動から小学校の「学習」へと単に教科としての連続性を思惟するのではなく、発達段階に即して子どもの表現力や創造力を育むことができるような、連携プログラムを開発することである。

平成26年度に筆者らが「日本語の語感とリズムを感じて自由に声や言葉で表現したり、音声表現にとまって自由に体を動かして遊ぶことを楽しむ」というねらいを設定して試みたわらべうたの実践では、園児が担任教諭と楽しそうにわらべうた風の《しゅりけんにんじゃ》を遊ぶ姿が印象的であった。この遊びはNHK幼児番組「おかあさんといっしょ」で放送されていた《しゅりけんにんじゃ》を担任教諭が作り替えたオリジナルの遊び歌である。筆者は、このわらべうた風の遊び歌と原曲とは同じ要素を持つ曲であるにも関わらず、異なる活動内容の展開や、対象年齢の広がりなどの可能性を見込み、興味を抱いた。

そこで、本学の「初等音楽3・4」の授業において、様式の異なる遊び歌の比較を通して、「表現活動の教材」について考える機会を設けることにした。上記2つの授業では、将来保育の現場で豊かで広がりのある音楽表現活動の実践を行うことができるような学生の

資質と能力を育成するために、「教材を自由に扱える力の習得」を目標としている。

本稿では、「初等音楽3・4」の授業で体験した様式の異なる2つの遊び歌から、学生にどのような学びが得られたのかを、授業後に行ったアンケート調査をもとに検討する。

2 「初等音楽3・4」の授業について

2.1 「初等音楽3・4」の授業概要

「初等音楽3・4」は1年次生対象の「初等音楽1・2」に続いて、2年次生と3年次生を対象とした科目である。これまでは「初等音楽1・2」と同様に、教師から指定された楽曲を教材として、「教材を自由に扱える力の習得」を目指して取り組んできた。また、コード奏の習得も目標の1つである。

2.2 「初等音楽3」第6回の授業の詳細

「初等音楽3」の授業では、これまで担当教員（南）が提供する教材を弾き込むことで学生は教材と向き合ってきた。教材を選択する行為、教材の在り方、活用方法など子どもの歌自体について考えるのは第6回の授業が初めてとなる。授業では以下の(1)～(3)の内容を行った。

(1) 様々な歌唱教材について

「唱歌」「童謡」「子どものうた」「わらべうた」「(手)遊び歌」など、歌唱教材の主な定義とその時代背景を簡単に説明した。そして、現在使用している歌唱のテキスト³は、曲が年代順に掲載されていることを伝えた。

また、現在我々が最も一般的に接している西洋音楽の手法に基づく音楽は、明治期の洋楽享受で始まったことを話し、明治期から現

代までの音楽の変遷を、その時代につくられた歌を口ずさみながら説明した。

【明治期について】現在《蝶々》《蛍の光》《庭の千草》などとして知られる曲が掲載されている西洋音楽手法による日本最初の歌の本である官製唱歌集が1881年刊行された。

文学界で起こった言文一致運動をきっかけに、田村虎蔵、納所弁次郎等が《金太郎》《うさぎとかめ》など、口語体で歌いやすい子どものための曲を世に送り出し、革新をもたらした。滝廉太郎の《鳩ぽっぽ》《お正月》などもこの時期の曲である。

1910年には国定教科書というべき『尋常小学校唱歌』が刊行された。《春が来た》《虫の声》《かたつむり》《ふるさと》などは、今も小学校音楽科の共通教材とされている。

【大正期について】大正デモクラシーの影響を受け、文部省の検閲で決められた曲ではなく、芸術的な作品を民間人が自由に作り、子どもたちに歌わせたいという赤い鳥運動が起こった。芸術的で情緒的な《赤い鳥小鳥》《かなりや》など多くの「童謡」が生み出された。

【昭和期以降について】昭和初期はメディアの発達で「童謡」が商業化された。《チューリップ》《まつぼっくり》《うれしいひなまつり》などはレコードの形で大衆に広がった。大戦を経て、保育の現場は、テレビと共に大きく進化する。実用的でメディアと一体化した現代の曲《おもちゃのチャチャチャ》《アイアイ》などは、新しい「子どもの歌」と呼ばれ、学生にもなじみ深い曲が多数ある。

これらの説明を聞いた学生は、これまで楽譜に書かれた音を間違わずに再現させることに傾注し、曲の時代背景や作曲家の意図、楽曲の使用目的などに無頓着であったことを認識するとともに、数ある子どもの曲のうち、知っている曲は僅かであることに気づいた。

(2) 「わらべうた」について

今回の授業でキーワードとなる「わらべうた」について説明した。『幼児音楽教育ハン

ドブック』⁴⁾によると、わらべうたは、「子どもたちが、遊びなどの生活の中で口伝えに歌い継ぎ、あるいは自由に作り替えてみた歌、作曲者が誰であるかは問題にされず、子どもたちの遊びの中で歌が自然発生的に生まれ、

(中略) 伝承されながら、いろいろな形の歌い方や遊び方へと変化してきた。時代や世相を反映して新しい歌が生まれ、子どもたちの即興性や創意によって古い歌が作り替えられ、また、既成の歌をも自由に組み込みながら、新しい魅力を創り出している。」と記されている。坂井(2010)⁵⁾は、「わらべうた」は「子どもの間で生まれ育まれ、口承で伝えられているもの」とし、大人が子供のために作り、楽譜化されている遊び歌との相違について言及している。

上記の内容をふまえて、学生に「わらべうた」は日本語の韻律が基になったわかりやすい音楽であること、手遊びや動きなどの身体表現を伴う楽しい音楽であり、遊びが柔軟で子どもたちにとって都合の良いものであること、文化を伝えるというだけでなく、リズム、音程、歌唱域において幼少期に学ぶ最初のステップに適していることを伝えた。

この授業で用いた作り替えられた《しゅりけんになんじゃ》は、楽譜を正しく表現するというより、子どもたち自身が遊びとして発展させることができる歌という点を重視し、「わらべうた風の」という言葉を使用した。

(3) 様式の異なる2つの遊び歌の体験

①原曲の《しゅりけんになんじゃ》

原曲の《しゅりけんになんじゃ》(谷口國博作詞、中川ひろたか作曲)は、NHKの幼児番組「おかあさんといっしょ」で体操のおにいさんの佐藤弘道が「体で元気に遊ぶ曲」としてDVDに収録している。忍者の動きを伴うアップテンポで軽快なシンコーペーションのリズムを含む西洋旋律の曲である(譜例1)。曲の最後では、足や頭に飛んでくる手裏剣をかわすために、「足しゅりけん」では跳びあがり、

「頭しゅりけん」では屈み、「にんじゃチョップ」では両手で挟むなど、即座に動作で反応

するところが面白く、子どもたちにも大人気の遊び歌である。

【譜例 1】原曲《しゅりけんにんじゃ》

♩ = 130 Em D

にん じゃ っ て なん じゃ もん ー じゃ にん じゃ っ て なん じゃ もん ー じゃ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

忍者のように 両腕・両足を広げる 人差し指を重ねる 両腕・両足を広げる
左右の人差し指を
立てて重ねる

C B

にん じゅ つ つ か っ て ど こ い く に ん じゃ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

人差し指を重ねる 両腕・両足を広げる 人差し指を重ねる 両腕・両足を広げる

Am Em

は や い ぞ に ん じゃ つ よ い ぞ に ん じゃ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

右へ小走り ジャンプ 左へ小走り ジャンプ

D F#m7/C Bsus4

しゅ り け ん シュ シュ シュ で { あししゅりけん
あたましゅりけん
にんじゃチョップ }

(動作) ↓ ↓ ↓

上下に拳を合わせる 手裏剣を投げる

日本音楽著作権協会(出)許諾第 1513611-501 号

作曲者の中川ひろたかは、かつて保育士として勤務した経験を持ち、保育現場での子どもたちの生活の中にある声や言葉や動きを歌に換え、子どもの遊びと音楽を一体化させた。幅広い年齢で歌われる中川の曲は子どもの気持ちに添う、自然で親しみやすい音楽である。

授業では、始めにこの曲の DVD を鑑賞してから、コード奏で弾き歌いの練習を行った。初等音楽の授業目的を、弾き歌いのレパートリーを広げることと掲げている学生も多く、新しい楽譜のコードを解説し、弾き歌いができるように取り組む姿勢は、真剣で集中しているように感じられた。10 分程度の個人練習後、全員で弾き歌いを行った。仕上げとして、

弾き歌いをする学生と、振り付けをつけて踊る学生とに分かれ、楽曲の楽しさを味わった。

②わらべうた風の《しゅりけんにんじゃ》

次に、担任教諭によって作り替えられたわらべうた風の《しゅりけんにんじゃ》を紹介した。K 幼稚園での活動風景を DVD で鑑賞した後、その楽譜（譜例 2）を提示した。

リズム譜で言葉を唱えた後、言葉に合わせて動きを確認した。そして、言葉と動きを合わせた後に、しゅりけんを投げるリーダーとしゅりけんを受ける側に分かれ、しゅりけんにんじゃ遊びを体験した（【写真 1】～【写真 3】）。

【譜例2】わらべうた風《しゅりけんにんじゃ》

♩ = 110

2/4

にん じゃっ て なん じゃもん じゃ にん じゃっ て なん じゃもん じゃ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

忍者のように 両腕を広げ 人差し指を 両腕を広げ
左右の人差し指を 右足を一步前に出す 重ねる 右足を前へ
立てて重ねる

に ん じゅ つ つ か っ て ど こ い く じゃ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

人差し指を
重ねる

しゅ り け ん シュ シュ シュ しゅ り け ん シュ シュ シュ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓

上下に拳を合わせて 手裏剣を投げる動き 拳を合わせる 投げる
手裏剣を投げる
準備

しゅ り け ん シュ シュ シュ で あし しゅりけん シュツ
あたま しゅりけん シュツ
ハリケーン
にんじゃ チョップ

(動作) ↓ ↓ ↓ ↓

拳を合わせる

学生はメロディーや伴奏が伴うものだけを「音楽」と捉えがちであるが、この唱えうたも音楽であると捉え、保育の場面で行う音楽の幅広さを伝えた。K幼稚園での実践報告として、園児がいろいろなしゅりけんを生み出した活動展開を伝えかけた時に、「針しゅりけんとか・・・」「ばくだんしゅりけんとか・・・

いろいろ作れる」という言葉が聞こえてきた。まさに、それが表現活動を楽しみ、遊びとして消化した結果生まれる、わらべうた本来の特質であると考えられ、学生自身がこのわらべうた風の《しゅりけんにんじゃ》を享受できたと感じられた。この2つの遊び歌を体験した後に、アンケートを実施した。



【写真1】 「にんじゃって」



【写真2】 「なんじゃもんじゃ」



【写真3】 「しゅりけんシュシュシュ」

2.3 「初等音楽4」第4回の授業の詳細

4回目の授業では、半年後の実習を見据え、が行いやすいことを伝えた。その一つの例として、半年前に学習した《しゅりけんにんじ

実習においては歌唱教材を使って、言葉遊び、身体表現等遊びの活動に発展させていく活動や》の活動を挙げた。半年前に1度だけ演習した曲を、学生が記憶しているかを確認する

ために、アンケートでまず曲を覚えているかを尋ねた。その後、この2つの曲を確実に思い出すために、原曲は弾き歌いを行い、わらべうた風の方は唱えうたで体験し、前回と同様の質問を実施した。

3. アンケート調査の結果と考察

3.1 「初等音楽3」のアンケート結果と考察

授業では、様式の異なる2つの遊び歌を体験した後、アンケート調査を行った。質問「2つの活動で（対象年齢を考慮せずに）使ってみたいのはどちらの曲ですか？」に対する回答を表1に示す。

表1 保育に使ってみたい曲の様式I

使ってみたい曲	人数
原曲	9
わらべうた風	20
決められない	7
無回答	1

2つの《しゅりけんにんじゃ》は、同じ要素を持つ曲ながら、原曲はポップス調の軽快な曲であり、もう一方はわらべうた風のシンプルな曲である。初回の《しゅりけんにんじゃ》体験後のアンケートでは、37名中20名(54%)がわらべうた風を使ってみたいと回答し、9名(24%)が原曲を選択した。

3.1.1 原曲の選択理由について

学生が原曲を選択した理由を表2に示す。

表2 原曲の選択理由

原曲を挙げた理由	人数
伴奏の音楽があった方がリズムが取りやすい	4
ピアノに合わせて歌うとまとまりやすい	3
興味・関心が高くなる	3
想像の幅が広がる	2
和音がおもしろい	1
ピアノがある方が音感が育つ	1
変化させやすい	1
覚えやすい	1
恥ずかしくない	1

原曲を選択した理由には、「伴奏の音楽があった方がリズムが取りやすい(4名)」「ピアノに合わせて歌うとまとまりやすい(3名)」「和音がおもしろい(1名)」「ピアノ

がある方が音感が育つ(1名)」などが挙げられ、学生の視点がリズムや和音、音感や歌のまとまりなど、音楽的なことに置かれているといえる。また、「想像の幅が広がる」「覚えやすい」「恥ずかしくない」など、学生自身が演奏することに対する原曲の効果的な側面も挙げられている。

「初等音楽」の受講生の多くはピアノへの関心が高く、技術力を向上させたいとの強い思いを持って授業に臨んでいる。こうした日頃の授業での学びが活かされ、第6回の授業では和音や伴奏法を工夫することによって、様々な種類のしゅりけんを音楽で表すことができていた。これらのことが、和音の面白さに気付いたり、音感の育ちに関心を寄せることにつながったものと考えられる。

3.1.2 わらべうた風の曲の選択理由について

学生がわらべうた風の曲を選択した理由について表3に示す。

表3 わらべうた調の曲の選択理由

わらべうた風を挙げた理由	人数
子どもと一緒に活動ができる	14
子どもたちの様子がよく見える	8
ピアノがなくてもできる	8
単純で活動しやすい	6
アレンジしやすい	5
好きなテンポでできる	3
歌詞の内容を理解しやすい	2
ゆっくりでも楽しめる	1
じゃがかわいい	1

学生がわらべうた風の曲を選択した理由には、「子どもと一緒に活動ができる(14名)」「子どもたちの様子がよく見える(8名)」「単純で活動しやすい(6名)」などが挙げられ、学生の視点が子どもとの関わりや子どもの様子など、子どもに対して置かれていることが特徴的である。また、「アレンジしやすい」「好きなテンポでできる」「ゆっくりでも楽しめる」などの理由も挙げられ、伴奏に縛られずに教材を自由に駆使する大切さを理解していることが窺える。

表現活動においては、子どもたちが教材と

一体化して意欲を持って活動に打ち込めるとき、感受性が育ち、創造性が育まれるといえる。教材を自由にアレンジし広げていくのは教師ではなく、子どもたちだということを念頭に置くべきである。

さらに、わらべうた調の選択理由には「歌詞の内容を理解しやすい」「じゃがかわいい」など、歌詞に関するものが挙げられていた。原曲とわらべうた風の曲の冒頭の拍とリズムを譜例3と譜例4より比較してみると、「なんじゃもんじゃ」の「じゃもんじゃ」の部分が、原曲ではシンコーペーションのリズムを使用することによって、1/4拍前に流れている。

【譜例3】原曲の冒頭部分



【譜例4】わらべうた風の曲の冒頭部分



この1/4拍が、活気的で躍動感あふれる音楽に変身させるのである。現代的でかっこよく感じさせるのはこのリズムの流れ方で、Jポップや英語歌詞の曲ではごく当たり前の手法である。

一方わらべうた風のリズムは、言葉の抑揚に沿って自然で非常に歌いやすい。歌詞もしっかり伝えることができる。平坦で拍に埋まり、正しい日本語を獲得する幼児期の音楽には適している。このような様式の違いから生じるリズムの違いを学生は直感的に感じ取り、自然なリズムにのっている日本語をよく聞き取って、「歌詞の内容を理解しやすい」と捉えたのであろう。

またこの遊び歌には「にんじゃ」「なんじゃもんじゃ」「どこいくじゃ」など、歌詞のあちこちに「じゃ」と発音する言葉が散りばめられ、この歌の楽しさを強調している。譜例5と譜例6より、原曲の「どこいくにんじゃ」

はさりげない呼びかけのようだが、わらべうた風ではポルタメントのような音程の使い方がみられ、親しみが感じられる。このポルタメントも伴奏に縛られないことで、自由にのびのびと表現することができる。「じゃがかわいい」という回答は、この教材が持つ言葉遊びの極意を学生がよく読み取れていることを示唆している。

【譜例5】原曲の「どこいくにんじゃ」



【譜例6】わらべうた風の「どこいくにんじゃ」



3.2 「初等音楽4」のアンケート結果と考察

「初等音楽3」での調査から半年後の平成27年5月に「初等音楽4」では『しゅりけん にんじゃ』の授業を振り返るために、改めてアンケートを実施した。

質問「半年前に活動した『しゅりけん にんじゃ』を覚えていますか」に対する回答を表4に示す。

表4 「初等音楽3」の教材の確認

覚えている曲	人数
原曲の方を覚えている	7
わらべうた風の方を覚えている	4
同じくらい覚えている	7
両方とも覚えていない	6
無効	1

アンケートでは、25名中7名が原曲の方を、4名がわらべうた風の方をよく覚えていると回答した。また、両方覚えていると回答した者も7名あった。初回から半年を経ているが、7割強の学生がわずか1回だけ体験した《しゅりけん にんじゃ》を記憶していることが確認できた。

この2つの曲を確実に思い出すために、原曲を弾き歌いした後に、わらべうた風の曲を唱えながら遊びを体験した。その後、前回と

同様の「2つの活動で（対象年齢を考慮せずに）使ってみたいのはどちらの曲ですか」との質問を試みた。回答は表5のとおりである。

表5 保育に使ってみたい曲の様式Ⅱ

使ってみたい曲	人数
原曲	13
わらべうた風	6
決められない	1
無回答	5

半年ぶりに、授業で《しゅりけんにんじゃ》を体験した後のアンケートでは、25名中13名(52%)の学生が原曲を使ってみたいと回答し、わらべうたを使ってみたいと回答した者6名(24%)の2倍以上であった。

半年前に実施した「初等音楽3」のアンケートの結果は今回とは逆で、わらべうた風を選択した学生の割合が原曲を選択した学生の2倍以上であった。こうした結果の違いについては、次章で検討する。

4 総合的考察

4.1 様式の異なる2つの遊び歌から得られた学びは何か

2つの遊び歌の体験後に実施したアンケートより、学生たちが授業を通して、和音の面白さに気付いたり、音感の育ちに関心を寄せていることが捉えられた。また、伴奏に縛られずに教材を自由に駆使する大切さについても理解できていた。これらの学生の学びに加えて、教材を自由にアレンジし広げていくのは教師ではなく、子どもたちだということを伝えていくことも必要である。

さらに学生たちは様式の違いから生じるリズムの違いを直感的に感じ取り、わらべうた風の自然なリズムで唱えられる日本語をよく聞き取り、それが歌詞の内容を理解しやすくしていることを学び取っていた。そして、これらの教材が持つ言葉遊びの極意についてもよく読み取っていた。

上記のような学びを学生たちは2つの遊びを通して得ることができたといえる。

4.2 アンケート結果の違いはなぜ生じたのか

「初等音楽4」のアンケートでは、図1に示したように原曲とわらべうた風の曲において「初等音楽3」とは逆の結果がみられた。では、なぜ2つの調査結果には違いが生じたのだろうか。どのような要因が作用していると考えられるだろうか。

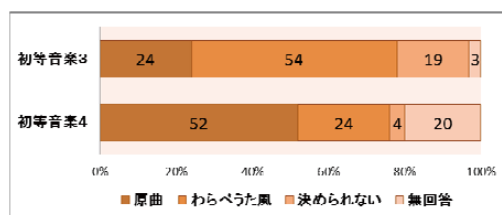


図1 「初等音楽3・4」のアンケート結果

ポイントとなるのは半年のブランクと、学生がこれまで「わらべうた」に対して抱いてきたイメージではないかと考える。

筆者らが保育者養成課程の学生を対象に行った「わらべうた」に対するイメージ調査では⁶、授業でわらべうたを体験することによって、そのイメージが「やや暗い」「古い」なから「明るい」「楽しい」という肯定的なイメージへと変化がみられた。わらべうたを体験した学生たちは「実際に体験してみるととても楽しく、将来子どもと一緒に楽しみたい」「おばあちゃんが歌っていそうだと思っていたが、遊んでみると子どもでも大人でも楽しんで遊びながら歌えるものだと思った」などの感想を述べたが、それは授業での体験が学生のイメージや意識の変化に作用したことを示唆している。

本研究においても、「初等音楽3」では《しゅりけんにんじゃ》を遊ぶ楽しい体験ができたからなのか、または「わらべうた風」と説明したことで学生のわらべうたに対するイメージに変化がもたらされたのか、結果としてわらべうた風の《しゅりけんにんじゃ》を支持した学生が多かった。しかし、半年後に結果は逆転した。それは、授業での楽しい体験や内容がその時点で一時的に学生の考えに作

用したとしても、継続的な積み重ねがなければ学生の中に定着し得ないことを示唆していると見えよう。そうした授業の体験を単発で終わらせることなく、継続的な積み重ねが重要である。

また、筆者らはわらべうた風の教材を支持し、選択を強制しているわけではない。逆転現象が生じた事実を真摯に受け止め、今後の授業構成に活かしていきたいと思う。そして、「どちらにも決められない」「どちらも使いたい」といった回答があったことも十分に理解している。大切なことは、その教材が持つ魅力、教材の発展性を見極める力を習得することである。教材の特色を感じることができれば、指導内容・指導方法もオリジナリティのあるアイデアが生まれる。子どもたちとユニークで楽しく有意義な活動が展開できる保育者としての資質と能力を育成するために、養成校の教員にはさらなる教材開発や授業内容の検討が求められている。

5 今後の課題

「初等音楽3・4」の授業では、目標に教材を柔軟に扱える力の習得を掲げている。コード奏の習得も同様のコンセプトである。そのために、唱歌、童謡、現代の子どもの歌、わらべうたなど、いずれかの分野に傾倒することなく、幅広く音楽に精通しておく必要がある。それが、教材の持つ魅力を存分に引き出し、指導内容を展開できる力を伸ばすことにつながっていく。

子どもたちと豊かで楽しい活動を展開するために、既成の曲を再現することだけに専心せず、教材を目的に合わせて柔軟に変化をさせ、対象となる子どもたちに適した音楽を提供できること、これらを授業目標に掲げていきたい。

今後はさらに、音楽の要素や教材の展開方法を検討しながら研究を進め、養成校としての役割を果たしていきたいと考えている。

【謝辞】

研究の実践にご協力くださいました K 幼稚園と小学校の先生方、子どもたちに記して深くお礼申し上げます。

※本研究は、JSPS 課題番号：25381279（代表者：岡林典子）の研究成果の一部である。

¹ ①岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南 夏世(2015)「幼小の子どもたちの育ちをつなぐ音楽活動の試みー遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに」関西楽理研究 XXXII pp.41-52

②岡林典子・佐野仁美・岡林典子・坂井康子・佐野仁美・南 夏世(2015)「子どもの表現力の育ちをつなぐ音楽教育プログラムの開発」日本保育学会第68回大会発表要旨集、③岡林典子・佐野仁美・坂井康子・南 夏世(2015)「幼小連携に対する学生の理解ー表現活動の実践に基づく演習をめぐるー」全国保育士養成協議会 第54回研究大会研究発表論文集 p.320、④岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・難波正明(2014)「幼小をつなぐ音楽活動の可能性ー京都幼稚園と京都女子大学小学校1年生の実践をふまえてー」『京都女子大学発達教育学部研究紀要』第10号 pp.77-86

²①白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・中島朋紀(2010a)「幼小のカリキュラムについての一考察ー「体育」「音楽」の領域を中心にー」『鎌倉女子大学学術研究所報』第10号

pp.17-23、②白川佳子・東ゆかり・西島大祐・荒松礼乃・中島朋紀(2010b)「幼小のカリキュラムについての一考察(その2)ー小学校1年生の「朝の会」「体育」「音楽」の授業参観を通してー」『鎌倉女子大学紀要』第17号

pp.103-111、③吉永早苗・岡本拓子・高見仁志(2013)「音楽教育から展開する保幼小連携ー[共通事項]でつなぐ保幼小の音楽I」学校音楽教育研究』vol.17 pp.145-146

④矢部朋子(2012)「学びの連続性を踏まえた音楽学習に関する一考察ー領域「表現」から教科「音楽」へー」『学校音楽教育研究』vol.16 pp.175-176

³ 全国大学音楽教育学会 編著『日本の子どもの歌』(2013)

⁴ 全国大学音楽教育学会(2001)『幼児音楽教育ハンドブック』p.142

⁵ 坂井康子(2010)「遊び歌の指導をめぐる諸問題」『音楽教育実践ジャーナル』vol.8 no.1 August

⁶岡林典子・坂井康子・佐野仁美・南 夏世「保育者養成課程の学生が抱いている『わらべうた』のイメージ」(2014)全国保育士養成協議会第53回研究大会研究発表論文集 p.191